

《10/24、25 大谷果樹組合 「産直」産地視察報告》

地産地消推進委員 三好和恵

山形県の大谷果樹組合を視察しました。

大谷果樹組合は、2000年から生協ひろしまが取引を始めた組合です。

大谷果樹組合は山形の生協とは、40年以上、産直の取り組みをされている生産者の集まりです。平均年齢50そこそこの若い、代替わりがちゃんとできている組合です。

「うそをつかないのが長く生協とつきあう秘訣」と組合長。

訪れた1日目は、「落荒（おちあれ）」と呼ばれる、風が強く、雨がパラッと来て、急に寒くなるこの地方特有の秋の天気でした。

りんご畑は、眼下に最上川が流れ月山、朝日連峰が見える空気の美味しい所がありました。

8時から5時まで畑で働く。日中収穫、夜出荷準備で、今の時期は多忙で睡眠時間が短くなること。

収穫作業は奥さんがたも手伝われるそうです。脚立に乗って収穫し、見てくれの良いのと悪いのを選別しながら収穫なさるそうです。



最上川が見える畑



山形の寒さでおいしくなる



大谷果樹組合のご夫婦は、みなさん「なかしえー(仲の良い)」夫婦(^^)／

収穫の見極めは、りんごの「しり」をみて、あめいろ（黄色）になっていて、触ってみて「てくてく（ざらざら）」になっていたら、熟れているそうです。視て触って熟れたものから収穫をするそうです。

りんご栽培は年中作業があり、1月は正月からリンゴの木の上の雪下ろし、剪定した小枝のかたづけ、春りんごの花が咲く季節は花芽の中心果だけ残し、側花は落とす作業、花摘みがあり、秋には葉摘み作業。葉摘みは葉陰にならずにりんごが色づき、甘く熟すように、りんごのまわりについている葉を落とす作業です。

ただ、葉を摘みすぎるとりんごのおいしさが落ちるので、ぎりぎりの線をねらうそうです。



たくさん葉っぱがある方がおいしい



収穫の見極めは“尻”見て触って！



私たちもたしかめてみました(^^)ゞ

それから、たま回し作業。日の当たっていない側を、りんごの軸を 90° 回して日が当たるようにする作業です。

接ぎ木のような、高接（たかつぎ）という作業で、品種を増やしていきます。

このようにリンゴ栽培には、手作業が多いようです。

「土作り」にこだわって、自家製のぼかし・肥料を作っておられ、りんご畑の土はふかふかしていて、柔らかい。しろつめ草やハコベが茂っていました。これらの草は、りんご栽培に適した土に生えるそうです。（土の酸が強いと、他の草が生えるそうです。）



りんご畑はふわふわの土でした



しろつめ草、ハコベが生えていたら「りんご栽培に適した土」だそうです



余談ですが、昔食べていたインドりんごっていうりんごを、今、見かけなくなりました。消費者の嗜好の変化で、甘いだけの、あまり酸味のないりんごは、出回らなくなったそうです

りんご畑で、りんごを丸かじりさせてもらいました。

果汁で手をびちゃびちゃにしながら、大谷果樹組合の畑のもぎたてりんごを頂き、「りんごってこんなに美味しいものなんだ」とあらためて思いました。

「りんごは、生協のコパルで！『大谷果樹組合のりんご』を注文しよーで！」と思いました。



40年以上生協と取引の歴史

